法華宗が種子島に於て被つた廃仏毀釈と復興

松井孝純

（一）

種子島に法華宗教団が成立したのは寛正二年（一四六二）以降である。慶林坊日隆（一三八五―一四六四）の弟子、定源院[1]日典（一四〇一―一四六三）が帰島し、石子詰法難で殉教死し、次いで同六年日典の弟弟子浄光院日良が来島し、法華宗を弘通した頃からである。やがて領主種子島時氏以下、全島文字通り皆帰妙法の宗教生活が行なわれるに至つたのである。

この法華宗繁昌の最盛期が過ぎ去つた文化七年（一八一〇）の記録[2]によると

島中寺院多キノ故ヲ以テ民財ヲ費スコト少ナカラズ。故ニコレヲ官ニ請ヒテ寺二十七宇ヲコハス。現和村ノ台運院坊、中之坊、大聖寺……

とある。これは全島十八ヵ村に七十五ヵ寺では維持費がまかなえぬと、薩摩の本藩へ寺をへらす申請をした[3]記録である。また天保年間の記録であるが、一石以上の寺祿を有する寺名と石高をあげて寺祿合計五百石とある。往時の法華宗繁昌の有様がその寺院数や寺祿などから伺えるのである。

また種子島出身僧で、京都本能寺・尼崎本興寺（この両大本山を両山と称す）の貫主となつた名僧智識も多く輩出している。即ち両山十五世具摂院日逕（慶長十四年寂63）、両山廿三世智泉院日達（万治三年寂60）など八指に余る。種子島の法華宗繁昌の証となる。

また天正十年六月の本能寺の変のその年の十月、本能寺へ見舞品として五色糸唐目一斤と琉球布五反が届けられ、その翌年に紅花十斤、黒布一反、皮袋一箇が届けられた。また鉄砲伝来の地であるから火薬類が、本能寺を通じて織田信長や豊臣秀吉に上納されている。これらは種子島が経済的に相当有力な位置を法華宗の中で占めていたからである。

また島主以下島民の日常生活に法華宗の宗教儀礼が浸透しており、種子島家の年中行事録のほとんどが、元旦から大晦日までその儀式で埋まつておる。また島民の人生儀礼の出

産、成長、病気、葬礼なども「師匠さん」と称せられる寺院住職を通じて行ない、一島一信仰としての法華宗信仰は、根強く島の人々の日常生活を支え、深く根を下して広がつていたのである。

この種子島は、薩摩藩の統治下にあるから、その廃仏毀釈の時期と方法は薩摩藩の政策どおり実施されたのである。

（二）

薩摩藩の廃仏毀釈は、水戸藩と同じく相当早くから計画された。慶応元年には御[4]醍院真柱など廃寺専門係を選任し、その具体的政策の検討をすすめていたのである。然し明治元年三月十七日、同二十八日の神仏分離の大政官布告が出た時、各地で頻々と行なわれた廃仏毀釈の暴行に対し、薩摩藩は直ちに実施に移すことを控えていた。そして翌二年三月の藩主忠義の夫人照子が逝去してから、次々と藩庁から布令が発せられて神仏分離という当初の計画が変更され、廃仏毀釈が実施されたのである。

而して明治二年八月八日の布令で薩摩藩内の各寺院の寺領のすべてが没収され、藩庫に収納され、寺宝・什器・石仏等は焼かれ破壊された。藩内の総数二九六四名の僧は強制的に還俗ささされ、兵役、教員、農工商、養育料下付に四分類され藩内から僧の姿が消え去つた。藩内の廃寺総数一〇六六ヵ寺である。本研究の種子島の廃仏毀釈もこの中に入り、同時に実施されたのである。

種子島最大の法華宗寺院は西之表本源寺である。寺領百石、社領三十石、位牌所二十石、計百五十石、然も種子島家の菩提寺である。然し同寺にも廃仏毀釈の暴行が襲うてきたのである。同寺の過去帳の明治二年の項に

九月四日、内外両書院を毀つ、書院は嘗て[5]究竟公の造る所、結構頗る極めて宏荘なり。今や公すでに邑を返して大いに冗費を省く、故に此の挙あり。毀つに及んで其の棟札を検するに宝永何年之を造る云云の語ありと云ふ

と書かれている。既に本堂や客殿が破壊され、続いて立派な書院が破壊されようとする状況を、その住職が胸中憤りを秘めつつ単々とした記述で表現しているのである。また同過去帳に

是より先、官、仏教を排す。是に至りて本島所在の梵刹釈寺、悉く廃毀に従う……その明年庚午正月、旧臣前田六郎兵衛宗成（砲隊半隊長）黒木弥次氏大（同半隊長）等、旧本源寺の祖廟の地の爾後荒蕪に属せんことを恐れ、因つて諸同僚と神社を其の遺址に作り、之に士族中の禄田（軍役高）十五石を納れて祭田と為さんことを謀る。遂に地頭平山氏に就き連署して請て曰く……平山氏之を許す。諸隊長等乃ち徇書を下して、遍く之を島中に告ぐ

とある。藩命によつて島中の仏教色を一掃し、種子島家歴代

の菩提寺を破壊してみたものの、翌三年には反省の心ある人々によつて本源寺の跡を、何んらかの形でとどめようとしているのである。

また種子島の由緒寺院は西之表日典寺である。定源院日典殉教地に建立された日典寺廟所は、拝殿と本殿の神仏習合形式の神社風建造物である。本堂、庫裡等が破壊されたが、貴重な高尾野氏と徳永氏等の石碑と共に、熱心な宗徒の護法心から日典神社と呼称し厄をのがれ現存している。

また現和の隆興寺は現在庄司港にあるが、小学校隣接の神社がその寺趾である。近政神社には隆興寺の五箇の巨石が現存し、その高さ二米の石塔には「道師日親花押」の刻字が残っている。

安納の本蓮寺は、現存の天御中主神社が寺趾である。その参道近くの高さ四米五十の自然石に「天明元年日蓮大菩薩五百遠忌蓮信坊日誠行年二十七歳」と刻字のある巨石や「文化十年日隆大上人三百五十遠忌」の刻字のある石塔など、おびただしい石塔群が往時の盛況を物語っている。

その他、現在の神社境内の処々[6]から題目石や、日蓮、日隆、日良などの遠忌報恩に擬した「奉誦久遠偈壱万部」とか「奉口唱要名二億二千三百万返島中講衆拝」など刻字のあるおびただしい石塔が、島内のいたる処から発掘され、保存されつつあるが、それらは明治初年の仏教壊滅作戦の惨虐な蛮行の前に、反抗する術を奪われた法華宗徒の涙の跡を見る思いがする。

（三）

僧達は廃仏の滔々たる時流に抵抗することの無益を知り、藩命のまま還俗したが、焼かれ壊されていく堂塔伽藍を傍観する者ばかりではなかつた。厳罰を掲げて臨んでいる監視役人の目を盗んでは、本尊類の避難隠匿を計る者が多かつた。現にその一部である釈迦・多宝・日蓮・鬼子母神像が掘り出され、南種子の善福寺に格護され、西之表の本源寺や野間の日輪寺には、日蓮や日隆の真筆マンダラが格護されている。

この廃仏毀釈を法華宗の大本山では、どのような表情で受けとめていたのだろうか、両山歴譜に伺うと

巳年薩隅日三州志摩津家領分下末寺各宗共廃寺廃仏……今ハ三嶋開基之御薫功モ泡沫ト成ル。恐縮無限、待時節再興致度者也。伏乞後哲有志之人ニ口伝給江

とある。また

道中騒々シク登山者勤檀僧モ稀レニナルヲ以テ自然道念馳怠ノ傾向トナリ……寺社奉行ニ代ルニ神祇局マタ教務省ト代リ行ク、代ノ有様ニ胸驚カシテ四、五年ヲ過ス時

と記録されている。廃仏毀釈の蛮行が政局不安定な明治初期のできごとであり、その対処に困惑している様子がよくわか

るが、それと同時に、種子島の廃仏毀釈が他の地方と違つて徹底的なものだけに、「泡沫となる。恐縮無限」とやりようのない思いを筆にしている大本山の様子が伺える。

（四）

法華宗教団しかない種子島の、おびただしい寺塔が一瞬にして消え失せ、寺祿を持ち帰依を得ていた僧侶の総べてが復飾還俗してしまつた島へ、鹿児島県参事田畑常秋名儀の信教自由の[7]布達が届いたのは明治九年九月であつた。西南戦争の前年である。種子島も西郷隆盛の私学校の生徒が出入し物情騒然としている頃である。

その頃の法華宗の中枢は、両派に分裂し三途成不の皆久論争に終始し、眼を外に向けようとする時局認識に欠けていた。従つて種子島の法華宗復興に力を入れることができない状態である。漸やく教団の中枢が動き出したのは薩南地方が平和になつた明治十二年である。即ち両山歴譜には

三島復旧ノ為ニ善応院日晧ヲ先駆トシ、井原日暁、牧瀬日誘ヲ随伴トシ、経尊下向セラレテ種益両島巡教

と記録されている。経尊とは両山九十世古森日経のこと、善[8]応院日晧とは南種子の出身で、廃仏強制還俗で名を柳田禎三と改め、後ち消息を絶つていた種子島僧である。

日晧は在島の法華宗徒を誘い、西之表に[9]本源寺仮説教所を設け、本源寺旧地返還運動を展開し、更に両本山に働きかけて貫首の来島布教を待つていたのである。従つて本興寺在住貫主日経の来島巡教の報は、島の宗徒を奮起せしめ、信徒結集し旧寺地返還、旧寺再建を叫ばしめた。その巡教の効果は極めて大きく、その巡教の足跡は「三島宗門復興の際、明治十二年、応需、両山九十世本事院日経」と署名のある紙マンダラや板マンダラとなつて、種子島は勿論、屋久島の法華宗寺院に現在も格護されている。

かくして種子島における法華宗寺院の復興は緒に就いたが、往時の盛況には遙かに遠く、十数ヵ寺の寺院が復興し現在に至つているのみである。種子島の廃仏毀釈の傷は意外に大きく開いたままである。

1　印度学仏教学研究　第二二巻第二号　二三三頁「種子島日典殉教考」参照　2　西之表市百年史（昭和四十六年刊）四〇六頁　3　種子島家譜　4　激烈な復古神道学者、造士館の訓導、廃仏毀釈の指導者、吉備津神社宮司になり七十五歳没　5　種子島領主十九代久基（一六六四―一七四一）　6　西之表西町の八坂神社の社頭に「慈遠寺」の寺名が刻字された、ひび割れ大石鉢が一対ある。この付近一帯は広壮な慈遠寺趾。また西之表天神町の天神社の神殿横の樹下に題目石がある。この付近一帯は広壮な大会寺趾。南種子の平山神社は善福寺跡。　7　明治維新「神仏分離資料」第四巻一〇五八頁　8　郷土人系（南日本新聞社編）四一三頁　9　本源寺檀徒春田日皎の自宅を仮説教所とした。